

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18500503

研究課題名（和文） 英国に残存する民俗フットボールの研究
－存続意義とスポーツの近代化の過程の考察－

研究課題名（英文） A Study about Folk Football Games Surviving in Britain

研究代表者

吉田 文久 (YOSHIDA NORIHISA)

日本福祉大学・子ども発達学部・教授

研究者番号：30191571

研究成果の概要（和文）：現在英国の 17 箇所の町、村に残存する民俗フットボールのうち、14 箇所のゲームの実態をできる限り正確に記録し、それらのゲームを類似性、多様性の視点から整理した。また、それらが近代化せず、存続した意味について考察した。ゲームが残存する根底には、それを近代スポーツの発展史上に位置づけるのではない、固有の意味、つまり強い伝統維持の意識、地域のアイデンティティー形成のための有効的手段という意味があった。特に儀式化されているゲームは地元の名士や長老、かつての勝者をメンバーとする独自の委員会によって組織的に運営されている。民俗フットボールは、近代スポーツからそぎ落とされていったスポーツ本来の楽しみ方を教えてくれる。

研究成果の概要（英文）：Folk football games were investigated in 14 out of 17 British towns or villages in which they continue to survive. The games were observed and categorized by similarities and differences in players, spectators, how the games were played and rules. Also the significance of these surviving games was considered. It was found that the games played a significant role in the maintenance of local tradition and regional identity. Especially, local games committees were found to be an important factor in this maintenance through the organization of game events and associated ceremonies. Finally this study mentions the change in the quality of enjoyment between the community-based nature of traditional football games and modern commercialized sports.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,000,000	570,000	3,570,000

研究分野：総合・新領域系、総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学

キーワード：民俗フットボール、存続意義、担い手、多様性、変容

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在のサッカーとラグビーの祖型とされるストリート・フットボールは、かつて英国の各地に分布されていた。それは、単なる私的な気晴らしではなく、ある社会的意味を持った民俗として地域の中に深く根を下ろし、また多様な形態を持っていたことから民俗フットボール(Folk Football)と総称される。

(2) この民俗フットボールに関する学問的関心は古く、19世紀初めのJ.ストラットの古典的(1801)においてどのような競技であったかという簡単な描写が見られる。その後、M.シャーマン(1887)、F.P.マグーン(1938)、M.マーブルズ(1954)によって民俗フットボールは発掘されていく。それにより競技形態の実態をより克明に知ることができるようになった。さらに、競技の特質を学問的に規定する試みも見られるようになった。例えば、E.ダニングとK.シャドによる民俗フットボールを社会学的な視点に基づいて分析し、近代スポーツと対比させながら、15項目にわたって「構造的特質」を抽出する研究(1979)はその代表である。しかしながら、その後、英国においてこの分野の研究の進展や成果の提示はなく、日本においても、唯一中房敏朗が文献を頼りに英国で行われている・いた民俗フットボールを取り上げ、そのゲーム内容の比較検討を試みた研究(1991)が見られるのみである。その中房の研究もフィールドワークによって、ゲームが民衆にどのように位置づき、実際の試合の様相を踏まえた上で分析整理されたものではなかった。

そこで、筆者は、1993年より単独で英国に残存する民俗フットボールの観戦に出かけ、その観戦記録を報告してきた。しかしそれらは、ゲームの背景や歴史性、地元住民との接触もほとんどない中で表面的なゲームの理解・解釈にとどまるものであった。

2. 研究の目的

本研究は、英国に残存する民俗フットボールの調査を通して、まず、ゲームの実態をできる限り正確に記録すること、そしてスポーツ史、スポーツ人類学においてスポーツの近代化の過程について議論されてきた「伝統」の保持と「近代化」の対立と共存という問題に一つの示唆を与え、さらに民俗フットボールと近代スポーツを対比し、検討することにより、21世紀におけるスポーツの意味やあり方を提示することを目的としている。

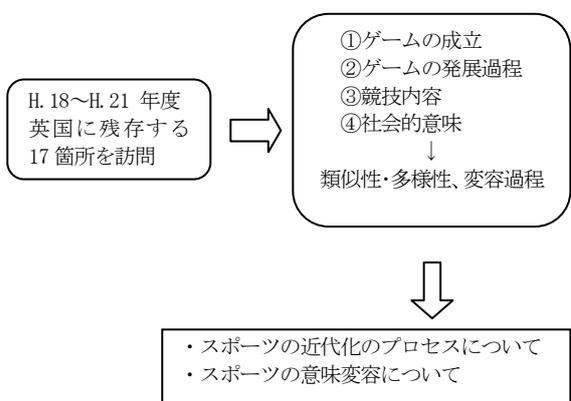
3. 研究の方法

本研究では第1に、英国に残存する民俗フットボールの地を訪れ、ゲームを観戦し、映像に

記録するとともに、そこに残る文献・記録・資料を探り、加えて地元住民(運営者、プレイヤー、観客など)へのインタビュー、アンケートなどを実施することによって、それらのゲームをできる限り正確に記録する。第2に、そのようにして記録されたゲームを①ゲームの成立について ②ゲームの発展過程について ③競技内容について ④ゲームの持つ社会的意味についてという視点によって整理する。そのような視点に基づき、ひとまず残存する民俗フットボールの特徴を整理した上で、第3に、かつて英国各地でプレイされたゲームの様相やその歴史的意義にも遡及し、民俗フットボールの衰退・消滅、変容・存続について考察する。英国におけるスポーツの近代化の過程を民俗フットボールが近代化・工業化によって衰退・消滅するが、ゲームへの関心はパブリック・スクールに引き継がれ、さらにアソシエーション・フットボールとして制度化されると説明されている。しかし、一方で、その後世界的な人気を持つまでに発展するサッカー(近代スポーツ)の浸食を受けながらも、いくつかの民俗フットボールが存続してきたのも事実である。そこで、担い手である民衆が民俗フットボールにどのような意味を付与させ、現在までゲームを守り、受け継いできたのかという視点からこれまで説明されてきたスポーツの近代化の過程を検証する。この作業は、スポーツ史、スポーツ人類学において議論されてきた「伝統」の保持と「近代化」の対立と共存に一つの示唆を与えるとともに、近代以前のスポーツの歴史的事実を辿ってみることで、自分たちが「当たり前」のように行っているスポーツの世界を相対化し、21世紀のスポーツ文化のあり方を考え、提示するところまでを含んでいる。

<フィールドワーク>

<ゲーム整理の視点>



4. 研究成果

(1) 調査の経過

初年度(平成18年度)は、国際情勢の悪化により、渡英の危険性が大きいことから、夏季の調査を直前で断念せざるを得ず、修正を強いられた。また、燃料費の高騰から予算的に複数回の調査及び滞在期間も縮小などの変更が求められ、本調査のみの調査活動となった。研究開始当初にこのような予期せぬ事態に遭遇したものの、それ以降は、いろいろな可能性を念頭に現地での調査がスムーズに行くように事前準備をすることで、ゲームの観戦、資料収集、インタビューに取り組むことができた。

特に、事前に行ったインターネットによる情報収集により、ゲームを組織・運営する委員会の広報担当者と接触し、現地での面談を約束することができたことは、現地での調査における進行をスムーズにさせ、委員会のメンバーしか参加できない会合やゲーム前後のセレモニー、パーティーにも出席できたという貴重な機会となった。

ゲームの観戦においては、ゲームをできるだけ正確に記録することに心がけ、写真とビデオに無事納めることができ、日本でゲームの様子を臨場感を持って再現できるものと思われる。

資料収集に関しては、現地の図書館での作業に加え、先述の委員会のメンバーから資料提供を受け、現地に赴かなければ手に入れない絶版の書物の複写も入手することができた。また現地で交友を深めることとなった人物を通して現地の新聞や広報誌に日本から調査にやってきたことが記事にもされた。そして、その成果の報告として、調査を終えたスコットランドのゲームについて、その独自性と多様性について国際学会で発表し、その和文、英文の論文作成も行った。

スコットランドに残存するゲームの調査は平成19年度末までに終了し、それと一部並行してイングランドのゲームの調査も実施した。具体的には、平成18年度にAlnwick、平成19年度にSedgefield、Workington、平成20年度にAtherstone、Ashbourne、そして平成21年度にSt. Ives、St. Columbへの調査を行った。しかし残念ながら、イングランドのゲームの開催が不定期や告解火曜日Shrove Tuesdayに重なっていることから、1年に1箇所の調査に限られ、3箇所の調査を残すこととなった。結果、今回の研究期間にすべての調査を完了することはできなかった。

(2) スコットランドに残存する民俗フットボールの類似性と多様性について

スコットランドの南端と北端とも言える地域

に、その多くが消滅して150年以上が経過しながら現在も存続している民俗フットボールの発展形態の実態が明らかになった。そして、地理的に隣接し、かなりの類似性が認められても、全く同じゲームは存在せず、多様性をもって存続していることも確認された。ここでは、調査を完了したスコットランドに残存する民俗フットボールの実態をその類似性と多様性の視点で整理したことを示す。

スコットランドでは Kirkwall, Jedburgh, Ancrum, Hobkirk, Denholm, Lilliesleaf, Duns の7箇所の町で現在もゲームが行われている。Kirkwall は、スコットランドの北部、Orkney 諸島の本島の中心的な町であり、他の6つの町はイングランドに隣接する Borders 地方に位置している(ただし、Duns は他の5つの町からは少し離れている)。スコットランドでは、これらのゲームを‘football’と呼ぶが、‘ba’ と呼んでおり、特に、Borders のゲームは‘handball’ (hand ba’) と呼ばれることが多い。

実際にゲームを観戦し、これまで収集した資料をもとに、7つのゲームの特徴を整理した。まず、それらを比較する視点として ①試合の開催日 ②試合の開始時間 ③参加者の年齢 ④使用されるボールの数(ゲーム数) ⑤チームの区分 ⑥試合会場 ⑦ゴールの場所 ⑧参加者の数 ⑨女性の参加 ⑩試合時間 ⑪ルールの有無 ⑫ゲームの運営組織の有無 ⑬ゲームの経済的基盤 ⑭始球する人物 ⑮勝者への褒美 ⑯レフリーの存在 の16項目を設定した(詳細は、末尾掲載の『名古屋短期大学研究紀要』及び『スポーツの冒険』にこの16項目による比較一覧を所収)。

共通性が多いと受け止められる Borders 地方のゲームと Kirkwall のゲームを比較対象として、その相違点を整理すると、①ゲームの開催日 ②用いられるボールの数(ゲーム数) ③ボールの形状(大きさや重さ、飾り) ④ゲームの規模(プレイヤーの数) ⑤試合時間 ⑥ゲームの運営組織の有無 ⑦勝者への褒美 などが挙げられる。しかし、Borders 地方でありながら、Duns のゲームは他と少し異なる要素を持っている。それは、Duns のゲームが既婚と未婚のチーム区分を伝統として引き継ぎながらも、1949年当時の時代性を含み込んだゲームとして変容して復活させたことによる。そして、Kirkwall のゲームは、バー委員会という運営組織を持ち、入場行進のようなセレモニーがあり、Borders のゲームの曖昧さとは異なり、厳格に定刻どおりゲームが開始されるなど儀式性を有し、民俗フットボールの中でも「共同体の生活パターンを構成する一要素として制度化されるまでに組織の整った」ものであると受け止めることができる。

しかしながら、Borders 地方のゲームと Kirkwall のゲームには、いくつかの類似点も見られる。例えば、参加人数の制限はなく、明文化されたルールを持たないこと、ゲームが住民からの寄付で成り立っていること、Duns を除いてレフリーは存在しない。それに加え、ゲーム中のプレイ行為においてもいくつかの類似性が見出される。それは、①ボールを蹴ることは稀で、ボールに群がる密集、あるいはスクラムプレイの連続 ②ボールを密輸する(smuggle)というプレイが重要な戦術となること ③スクラム内での激しい身体の圧迫 ④ときに激しい殴り合い ⑤着衣の破損などである。かつてのゲームは死を伴うほどかなり激しいものであったことは理解されているが、現在は年配者がそれを治めることができ、また家屋の損壊に対して自粛するなどプレイヤーが感情をコントロールできる範囲での激しさと理解される。

そして、Borders 地方のゲームはいくつかの違いはあるものの、かなり類似している。ゲームの開催日が伝承詩に基づいて決められていること、ボールの大きさや装飾、勝者への褒美に加え、ゲームの様相がほとんど同じであるなど Borders という地域にある町や村が過去、そして現在も何らかの関係性を保ち、支え合いながら存続しているように思われる。地元の人々は口をそろえて Borders は「昔から保守的な地域だから」とその類似性の理由を問う質問に答えていた。

民俗フットボールのゲーム様相とボールの関係について、ボールはプレイヤーの興味や嗜好に合わせて変化したという指摘があるが、ここで取り上げたゲームでは、ボールは単なるゲームの一用具ではなく、一定の意味や思いが込められた不変の存在としてゲームをどのようにして楽しむか追求されてきたように思われる。この解釈には Borders のゲームと同じような小さなボールを用いながら、かなりの頻度でボールをキックしてプレイするイングランド北東部に残存する Sedgefield のゲームの存在が参考になる。

(3) 民俗フットボールの変容—近代化との対峙と共存

1) 民俗フットボール固有の価値

Kirkwall の住民に実施した Ba' についてのアンケート調査によると、彼らがこれまで受け継いできたゲームをサッカー、ラグビーの原形、祖形とは受け止めず、まったく別もの、異なる存在であるとする。

Kirkwall では、地元新聞記事によると、1891年のクリスマスの日に Ba' とアソシエーション・フットボールのゲーム(初めての開催)が

同時開催されるということがあった。一定の観戦者がいたそうであるが、翌年からは行われなくなった。他の町では、アソシエーション・フットボールの紹介を契機に民俗フットボールは消滅し、アソシエーション・フットボールがとってかわったところがあり、また住民投票によってその両者を選択するというも行われたところもある。しかしながら、Kirkwall では、Ba' には何ら影響は与えられず、現在まで存続している。確かに、現在ではゲームの参加者は、ラグビー選手もいればサッカー選手もあり、それらのプレイヤーとして日常的に楽しんでいる人たちも多いが、Ba' はルールがなく、審判もない、コートやユニフォームもないゲームであり、近代スポーツの特徴を備えていないということから、「ルールに規定されたゲームにはない開放性と自律性が共存する世界に身を置く心地よさが Ba' にはある」という。

近代という社会にはない人間の本性が現れる世界を地元住民が共有することで共同体の成員としての自覚とその再認識が自然と生成され、共同体が新たに再構成されているともいえる。それは、Ba' とサッカー、ラグビーはまったく比較対象にはならないという発言が老若男女問わず寄せられることに裏付けられる。

2) 社会変化と民俗フットボールの変容

しかしながら、現存する民俗フットボールは、それが発生したといわれる中世のゲームのまま残っているわけではなく、近代化という社会変化に伴って変容してきているのも確かである。

それは、まずゲームの行われるコートに現れる。たとえば Kirkwall では、町中で行われていたのが教会前の空地へ、そして再び町中へと移り、また Alnwick では、町中から城主の所有する空地へとゲームのコート・会場が移動した。民家が少なく、人の生活範囲が狭い中では、ゲームが町中で行われても、民家はじめ町の建物、施設に及ぶ被害はそれほど問題にされなかった。しかし、都市化が進み、人口が町に集中するようになると、それはゲームをプレイする側にはゴールまでのいろいろな道筋が考えられ、面白さが増すという見方もできるが、町に移り住み、また仕事の間を確保した住民にとっては、厄介な存在となる。人々がもつ生活感覚、道徳感、治安維持などの変化によって、たとえゲームの意義を感じてもその荒々しさによる家屋の破損をその代償とすることはできなくなった。なお、現在英国に存続している 17 箇所の民俗フットボールの中で、指定された空地でゲームがおこなわれているのは、先述の Alnwick のみである。

また、ボールも変化している。民俗フットボールでは、牛や豚の膀胱が使用されたというのは有名であるが、資料からもその記述が確認できる。その後、牛の皮の中にコルクくずや藁を詰めたボールへと変化する。それは、ボールの耐久性を考慮したこと、そしてゲームの様相がスクラム状態の中でボールを奪いあい、また手に持って走るというプレイに適したものを求めた結果である。しかし、ボールを蹴るといふプレイが多いゲームでは、少し軽い性質のボールへと変化していった。しかし、近代サッカーやラグビーのボールのように、ゴムチューブの中に空気を入れて膨らませたボールへととは変化していない。ただ、唯一 Alnwick のゲームは現在のサッカーボールを使用している。

戦術的には、ボールにプレイヤーが密集し、その中でボールの争奪がおこなわれるが、そこで、ボールを保持しているプレイヤーから味方プレイヤーへとボールが渡り、ダミー・プレイなどを行い、密輸するというのが一般的である。ボールの大小によってダミー・プレイの頻度が異なっているように思われる。暗くなるまでまってそこから一気にボールを運び出すということも考えに入っている。しかし、これらはかつて行われていた民俗フットボールでみられた戦術であり、ここでは近代スポーツの複雑な戦術は必要ない。

(4) 民俗フットボール存続意義

1) 民俗フットボールを存続させる意味

Ashbourne のゲーム及び Kirkwall のゲームでは英国内にとどまらず、海外からもテレビ局が取材に訪れている。それは、W 杯サッカー大会開催の前にサッカーのルーツとしてそれらのゲームを各国内で放送するためである。それにより、ゲームを観戦しようとして現地を訪れる観光客も少なくない。特に、Ashbourne では、プレイヤー含めゲームに 5000 人近く集まるといわれ、その中には英国内だけでなく、ヨーロッパ、アジアからの観光客もいる。2 つの町では、観光収入を得るイベントとしてゲームを前面に打ち出しているわけではないが、少なからず期待されている。しかし、その 2 つの町を除いた他のゲームは、ほとんど地元住民だけで年 1 回(ところによっては 2 回~3 回)の行事となっている。

日本と同様に若者が都会へと流出していく状況は英国も同じであり、特に産業革命による都市への人口の流入がゲームを大きく変容させた。かつて英国全土で行われていたといわれる民俗フットボールは、一般的に国王や統治者の禁止令や中止に導く議会の法令によって消滅していったといわれているが、それは大きな町のこ

とであり、小さな村では都市化によって人口が激減し、それによりゲームの担い手がいなくなり、ゲームが消滅したところが多い。現在、ゲームが存続している村でも人口減少の傾向があり、町への帰属意識を維持したり、若者の U ターンを期待してゲームが開催されている。一方、人口が流入している町では、新しく移り住んだ住民との一体感を形成する役割がゲームに期待されている。

いくつかのゲーム (Kirkwall, Jedburgh, Ancrum) では、大人のゲームだけでなく、子どもたちのゲームも行われ、また大人のゲームは消滅したが、子どもたちによってゲームが継承されているところ (St. Ives, Lielisleaf) もある。また、St. Columb で出会ったプレイヤーが「小さいうちから事あるごとにゲームの話を子どもにしている。これが大切なんだ」と話していたように、大人が子どもたちにゲームの次の担い手となるように期待し、先人から受け継いだ我が村や町の大切な伝統を引き継ぎ、守ろうという強い意志が受け止められる。

このように、民俗フットボールの存続には、それをサッカーやラグビーという近代スポーツの発展史上でとらえるのではない固有の意味、つまり伝統維持の強い意識、そして地域のアイデンティティ形成の有効的手段という意味が込められている。

小さな村のゲームでは、そこに住む長老やオールド・プレイヤーがゲームを個人レベルで運営にあたっているが、比較的大きな町では、地元の名士や有力者に加え、長老、オールド・プレイヤーたちが組織された委員会がミーティングを重ねゲームを組織しその運営にあたっている。特に Kirkwall では、ゲームによる家屋や施設の破壊に対する補償問題から町の議会がゲームの廃止を求めたが、委員会が議会と何度も協議の場を持ち、回避させた。このような委員会の設置は、議会とプレイヤーとの間の直接的な衝突から生じるゲーム消滅の危機を回避するため、そしてゲーム運営に必要な資金調達のために住民が考え、生み出した方策であった。

2) 近代スポーツへのアンチテーゼとしての民俗フットボール

近代スポーツの特徴である「競争(性)」は、時代を経て勝利が目的化し、「勝利至上主義」へと転化した。さらに、スポーツはビジネスのターゲットとなり、商品化され、また、メディアはプレイする者からプレイを見る者の満足を満たすことを第一にスポーツを扱うように変わってきた。つまり、スポーツの目的性を問い直すべき問題として、勝利至上主義、ドーピング、商業主義(商品化・消費化)、政治化、民族問題、

環境破壊などが指摘され、現代社会が生み出した問題・難問をスポーツがそのまま引き取り、スポーツがあたかもそれらを現出しているように写し出されている。

このような近代スポーツの未来を展望すると、決して明るくはなく、古代オリンピック同様に近代オリンピックも消滅に向かっているという指摘やバーチャル化が進み、自らの身体を用いないゲームの世界に追いやられるという予想すら示されている。これは、スポーツが本来の姿からあまりにも変質してしまい、手のつけようのないレベルまで到達してしまったということである。ルールもなく、審判もない中で生じる問題は自分たちで解決し、ユニフォーム、ゼッケンがなくてもどちらのチームの誰かがわかり、切り取られた空間ではなく、町中のどこへでもボールを持ち運ぶことができるなど、勝ち負けの決定の厳格さを追求する近代スポーツとは真逆ともいえる、別言すれば牧歌的なスポーツの楽しみを民俗フットボールでは味わえる。地元住民やプレイヤーは、近代スポーツとしてのサッカーやラグビーのルーツとして民俗フットボールをとらえていないというのも理解できる。彼らにすれば、ゲームがマスコミに取り上げられ、広く知られることを歓迎する一方で、スポーツ史関係初めとする研究者たちが勝手にルーツとして紹介しているとの反論もあるように思われる。

(5) 成果と今後の課題

今回の研究の最大の成果は、英国内に散在する現存の民俗フットボールの実像をできる限り正確に映像に記録することができたことである。これは英国内でもそのような資料は保存されておらず、ましてや日本の研究者は皆無であることから貴重な資料収集ができた。

しかし残念ながら、確認した17箇所のゲームすべてを観戦し、調査することができなかった。人口の少ない村や町では、ゲームの開催日が不特定であり、急遽、自分たちの都合を優先して日程の変更をするということがある。当然ながら、ゲームの観戦にやってくる人たちのことを顧慮することはない。そのような予期せぬ事態により、今回イングランドに残存する3箇所のゲームが未調査となった。その結果、イングランドという地域的枠組みでゲームの特徴を整理することができず、成果の公表もスコットランドに限定したものとなった。今後、未調査のゲームをぜひ調査し、イングランドに残存するゲームについて整理すること、そして英国という枠組みで整理することができるかどうかの検討も併せ、研究を継続していくことが必要となる。

今回精力的に資料収集に取り組み、日本では

紹介されていない、地元だけに保存されているいくつかの貴重な資料も入手することができたが、ゲームのより詳細な理解には、今回築くことができた地元住民との関係を頼りにさらに資料の発掘、またそれを補う口述による情報収集をすることが必要である。その上で、中世の民俗フットボールと近代スポーツの間に存在する断絶を埋めるさらなる作業に取り組みたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①吉田文久、「Investigation of Folk Football Games Surviving in Scotland -Differences and Similarities-」(英文)、名古屋短期大学研究紀要、第47号、85～94頁、2009(査読無)

〔学会発表〕(計 1 件)

①吉田文久、「Investigation of Folk Football Games in Scotland -the differences and similarities-」ISHPES(International Society of the History of Physical Education and Sport)&ISSA(International Sociology of Sport Association) Joint World Congress 2007, Copenhagen 2007.8

〔図書〕(計 3 件)

①吉田文久、「解説」、『中村敏雄著作集第8巻-フットボールの文化論-』(吉田文久編)、創文企画、318～332頁、2009

②吉田文久、「スコットランドに残存する民俗フットボールの特徴 -その類似点と相違点-」『スポーツ学の冒険』(船井廣則、松本芳明、三井悦子、竹谷和之編)黎明書房、109～120頁、2009

③吉田文久、「フットボール」、「スコットランド・フットボール協会」、「スコットランド・フットボールリーグ」、「ストリートフットボール」の項、『スコットランド文化事典』(木村正俊、中尾正史編)、原書房、1107～1113頁、2006

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 文久 (YOSHIDA NORIHISA)

日本福祉大学・子ども発達学部・教授

研究者番号：30191571